古英語の所有代名詞の言語特性

藤　原　保　明

0．はじめに

古英語の代名詞に関するこれまでの記述は、Mitchell (1985) をはじめ、詳細かつ綿密であるように見えるが、これらの代名詞の言語特性に関して今回新たに分析を試みた結果、従来の記述には含まれていない新たな事実が存在することが分かった。すなわち、mīn, sīn, uncer などの本来の所有代名詞と、所有を表すために用いられた人称代名詞の属格形の his, hire, hira の間には、屈折の有無以外に明確な言語上の区別があることが判明した。本稿の目的は、これらの事実を提示し、従来の記述を補完することにある。

Ⅰ．所有代名詞と所有を表す人称代名詞の区別

(1a) にあげた古英語の所有代名詞は、いずれも形容詞の強変化と同一の屈折をする。たとえば、mīn が男性名詞を修飾する場合には、(1b) のような語尾を伴う。ただし、-e で終わる ūre は、(1b) に示したように、同じく -e で終わる grēne 'green' などの形容詞と同一の語形変化をする (Cassidy & Ringler, 1971 : 36)。sīn には性と数の区別はなく、uncer と incer は両数 (dual) の場合に用いられる (Wright, 1925 : § 464)。一方、(1c) にあげた 3 人称代名詞の属格形は、所有を表す場合、いずれも語形変化をしない (Moore & Knott, 1955 : § 344 ; Quirk & Wrenn, 1957 : § 64)。なお、(1a) の所有代名詞が屈折するのは、主要語 (head) である名詞に依存しているために、性・数・格を一致させるからである。一方、(1c) の人称代名詞が屈折しないのは、既出の名詞の性と数に一致して語形がすでに決定されているため、主要語の性・数・格には影響されないからである (Mitchell, 1985 : § 290)。(1a) と (1c) の人称代名詞には方言や時期の違いによる異形があり、sīn は詩で用いられることが多いと言われている (Wright, 1925 : § 464)。

(1)(a) mīn 'my'
þīn 'your'
sīn 'his, her, its, their'
ūre, ūser 'our'
ēower, īower 'your'
uncer 'of us two'
incer 'of you two'

(b)

単数	主格	mīn	ūre
	属格	mīnes	ūres
	与格	mīnum	ūrum
	対格	mīnne	ūrne
複数	主格	mīne	ūre
	属格	mīnra	ūrra
	与格	mīnum	ūrum
	対格	mīne	ūre

(c) his 'his, its'
hire, hiere, hyre 'her'
hira, hiera, heora, hyra 'their'

本稿の目的は、(1a) と (1c) の2組の代名詞の違いが屈折の有無だけに止まるのか、それとも統語や韻律にも及ぶのかを明らかにすることにある。たとえば、統語面では、所有代名詞の属格形が主要語を限定する場合の語順の特徴はどうであったかが関心事となる。Fries (1940) によると、古英語の主要語—名詞の属格形という語順は900年頃には47.5%、1000年頃には30.5%、1100年頃には22.2%、というように次第に減少し、1300年頃にはこの語順は皆無となることから、主要語—所有代名詞という語順にも似たような史的変化が認められるのかどうか、とりわけ900年以前の特徴はどうであったかに焦点が集まる。韻律上の関心事としては、所有代名詞は屈折と統語上の機能が形容詞と同一であるが、頭韻やリズムなどの面でも同一の特徴を示すかどうかという問題がある。

II. 分析

2.1. 分析の規準

上記の理由から、本稿では詩を分析対象とし、*Beowulf* と *Genesis A* の2編から例を抽出することにした。テキストとして、前者には Klaeber (1950), 後者には Krapp (1931) を用いた。分析は(2)の「頭韻階級の原則」に従って行われるものとする (Fujiwara, 1987, 1990)。

(2) 頭韻階級の原則

(a) 2つ以上の語から成る半行では、頭韻語の選択は、語の意味と文法上の機能とは無関係に、語彙範疇の相対的な階級に従って自動的に決定され

る。

(b) 階級が高い語は、半行中の位置とは無関係に、階級が低い語に優先して頭韻する。各半行での頭韻の優先順位は次のとおりである。

(i) 名詞、形容詞、派生副詞

(ii) 本来語の副詞の一部

(iii) 動詞（非定形・定形；ただし、be 動詞と法助動詞は除く）

(iv) 機能語、本来語の副詞の一部、be 動詞、法助動詞

(c) 半行を構成する複数の語が同一範疇である場合、頭韻の権利は半行の左寄りの位置にある語に与えられる。

(d) 本来語の副詞は 3 つの下位範疇に分けられる［詳細は省略］。動詞は優位な非定形と劣位の定形という 2 つの類に厳密に区分されている。

(e) 第二半行、および二重頭韻が実現している第一半行では、(a)〜(d)の原則が守られないことがある。これらの場合は、それぞれ「第二半行での詩的許容」、「二重頭韻の半行での詩的許容」と呼ばれる。

(2)の原則によると、頭韻は単一頭韻が見られる第一半行で忠実に実現していることになるため、種々の言語現象の一般化を試みるにはこの半行が最も適しているということになる。

2.2.『ベーオウルフ』における所有代名詞の言語特性

『ベーオウルフ』の場合、所有代名詞が限定する主要語の直前に位置する（3a)のような例は第一半行に11回用いられている。以下、このような位置を占める所有代名詞を前置語（prepositive）と呼ぶことにする。なお、これら11例の中には、主要語と緊密な統語関係にある形容詞ないしは名詞が所有代名詞と主要語の間にくる（3b）のような例も含まれている。一方、（3a,b）のような例とは逆に、所有代名詞が限定する主要語の直後に位置する（2c,d）のような例は第一半行に 9 回用いられている。以下、この種の代名詞を後置語(postpositive)と呼ぶことにする。これら合計20の所有代名詞は頭韻にはまったく加わっていない。これは、単一頭韻の第一半行中で頭韻階級の原則が忠実に守られている証拠であるとみなせる。この原則によれば、(所有)代名詞は名詞または形容詞と共起する半行内では名詞や形容詞に優って頭韻することはできない。ちなみに、所有代名詞は所有形容詞（possessive　adjective）とも呼ばれるが（Campbell,1959：§705)、この名称は、少なくとも頭韻に関する限り妥当とは言えない。なお、本稿では（所有）代名詞は斜字体で表し、主要語には下線を施すこ

とにする。

(3)(a) Wæs *mīn* fader folcum gecȳþed,
'My father was famed among the people' (262)

(b) *mīn* yldra mæg unlifigende,
'my elder brother (was) lifeless' (468)

(c) aldre *þīnum,* gif hē ūs geunnan wile,
'to your lord, if he will grant us' (346)

(d) dryhten *sīnne* drīorigne fand
'(he) found his chieftain bloody' (2789)

第二半行の場合、注目に値するのは、主要語の直前・直後という、所有代名詞にとって「正常な位置」から分離した（4a,b）のような例が10（前置語９、後置語１）あり、これらがすべて頭韻していることである。この事実は、正常な位置からの逸脱と頭韻は密接な関係があることを示唆している。しかし、(4c)のように正常な位置で頭韻する例は、前置語の場合39例中16例もあることから、「第二半行での詩的許容」を受けている可能性も高いため、両者の関係については慎重な検討を要する。後置語は頭韻上いっそう興味深い特徴を示す。すなわち、(4d)のように所有代名詞が主要語の直後にきて後置語となる例は30あるが、主要語である名詞が常に直前にあって頭韻するため、所有代名詞はまったく頭韻できない。ところが、(4e)のように所有代名詞が第二半行の冒頭にあり、先行する第一半行中の主要語を限定する半行またがり (enjambment) となる場合、所有代名詞は該当する６例のすべてにおいて頭韻に加わっている。半行というのは、あくまでも韻律上の単位であるが、このような半行またがりの例は統語上も意味ある単位であることを示している。

(4)(a) mearcað mōrhopu; nō ðū ymb *mīnes* ne þearft
līces feorme leng sorgian.
'stain the moor-hollow; you need not care for the food of my body any longer' (450-1)

(b) eorlīc ellen, oþðe endedæg
on þisse meoduhealle *mīnne* gebīdan!'
'earl-like bravery, or endure my last day in the mead-hall' (637-8)

(c) þēoden mærne ymb *þīnne* sīð,
'the famous prince about your journey,' (353)

(d) þær mē wið lāðum līcsyrce *mīn*

'then my coat of mail (helped) me against foes' (550)

(e) gif ic æt <u>þearfe</u>　　*þīnre* scolde

'if I should (be deprived of my life) in your need' (1477)

次に、二重頭韻が見られる第一半行の場合、所有代名詞が見かけどおり頭韻に加わっているのか、それとも、たまたま主要語と同一音で始まっているだけなのか区別しがたい。二重頭韻は当時の詩人たちにとって韻律上最良の型とみなされていた根拠があるが(藤原、1990：172-83)、最も低い頭韻階級に属する代名詞には「二重頭韻の半行での詩的許容」が認められないことから、本稿では（5a,b）のような前置語6例と（5c,d）のような後置語の２例を二重頭韻の例から除外し、単一頭韻の例に含めておく。ちなみに、２行も前の離れた位置から主要語を限定する例が第一半行に1例（＝5d）ある。

(5)(a) "Meaht ðū, *mīn* <u>wine</u>,　　mēce gecnāwan,

'Can you, my friend, recognize the sword' (2047)

(b) *sīnne* <u>geseldan</u>　　in sele þām hēan

'his comrade in the high hall' (1984)

(c) nō ðȳ ǣr <u>suna</u> *sīnum*　　syllan wolde,

'nevertheless he would not give to his son' (2160)

(d) . . . <u>Blǣd</u> is ārǣred

. . . . . .

ðīn ofer þēoda gehwylce.　　Eal þū hit geþyldum healdest,

'Your renown is raised ... over all people. You keep it all steadily' (1703b-5)

人称代名詞の属格形は一般に所有代名詞として扱われていることから、本稿でも所有代名詞の場合と同じ観点から分析することにする。最初に、第一半行の場合、注目すべき特徴として、(6a,b)のような前置語は31例あるのに対して、後置語は（6c）の１例に止まるという両者の際立った頻度差があげられる。さらに、これら合計32の例はいずれも頭韻せず、このうち、(6d,e)の２例は句またがりをしているにもかかわらず頭韻に関与しない。

(6)(a) þēah ðe hē *his* <u>brōðor</u> bearn　　ābredwade.

'though he killed his brother's child' (2619)

(b) *hire* selfre <u>sunu</u>　　sweoloðe befæstan,

'her own son to commit to the flame' (1115)

(c) <u>winedryhten</u> *his*　　wætere gelafede

'washed his friendly lord with water' (2722)

(d) þæt ic *his* ærest ðē ēst gesægde ;
'that I should first say to you its transmission' (2157)

(e) þēah ðe ōðer *his* ealdre gebohte,
'though one of them paid for it with his life' (2481)

人称代名詞は第二半行に62例生じるが、このうちの61例は（7a-c）のように前置語となっていて、後置語は（7d）の１例にすぎず、両者の頻度差は第一半行の場合よりはるかに大きい。これらの人称代名詞が頭韻する例は、正常な位置はもとより、分離した（7e）の場合を含め、１つも生じていない。これは第一半行の場合とまったく同じである。

(7)(a) sweordbealo slīðen æt *his* selfes hām,
'the cruel death by the sword in his own home' (1147)

(b) frēolicu folccwēn tō *hire* frēan sittan.
'the noble folk-queen (went) to sit by her lord' (641)

(c) wīston ond ne wēndon, þæt hīe *heora* winedrihten
'(they) knew and did not expect that they (should see) their friendly ruler' (1604)

(d) þrecwudu þrymlic. Wæs þēaw *hyra,*
'the mighty spear. (It) was their custom' (1246)

(e) swancor ond sadolbeorht ; *hyre* syððan wæs
. . . br[ē]ost geweorðod.
'slender and saddle-bright ; her breast was then ... adorned' (2175-6)

両半行の分析結果を綜合すると、人称代名詞の前置語は92例あるのに対して、後置語は２例、頭韻に加わる語はいずれも０という、きわめて注目すべき特徴が浮かび上がってくる。

『ベーオウルフ』における所有代名詞と、所有を表す人称代名詞のすべての例を、第一半行・第二半行、前置語・後置語、正常な位置（直前・直後）・分離の区別、頭韻の有無という観点からまとめると、(8)のようになる。

(8)

		前置語		後置語	
		第一半行	第二半行	第一半行	第二半行
所有代名詞	正常位置	17（頭韻0）	39（頭韻16）	10（頭韻0）	30（頭韻6）
	分離	0	9（頭韻9）	1（頭韻0）	1（頭韻1）
	合計	17（頭韻0）	48（頭韻25）	11（頭韻0）	31（頭韻7）
人称代名詞	正常位置	31（頭韻0）	61（頭韻0）	1（頭韻0）	0
	分離	0	0	0	1（頭韻0）
	合計	31（頭韻0）	61（頭韻0）	1（頭韻0）	1（頭韻0）

2.3.『創世記A』における所有代名詞の言語特性

『ベーオウルフ』は古英詩の中では最も長い詩であるが、用いられている所有代名詞の数は、何らかの一般化を試み、それを他の詩に当てはめるには十分なものではなく、詩人の個人語、時代、方言などの特徴が入り込んでいる可能性もある。そこで、本稿では比較的規模の大きな古英詩『創世記A』をとりあげ、『ベーオウルフ』の場合と同一の規準で分析し、両者の結果を比較してみたい。

最初に、所有代名詞が第一半行で単一頭韻を形成する場合、(9a)のように主要語の直前に生じ、前置語となる例は15、(9b)のように直後に生じ、後置語となる例は50あるが、いずれもまったく頭韻に関与しない。ところが、興味深いことに、分離する場合には頭韻することもある。すなわち、前置語となる5例のうち、(9c) のように頭韻に加わるのは3例だけであるが、後置語となる7例は(9d) のようにすべて頭韻に関与している。

(9)(a) *þīnum* frumbearne,　　þæt feorhdaga
'to your first-born son, so that (a great many of) days of life' (2360)

(b) blisse *mīnre*　　and blētsunge,
'my grace and blessing' (2333)

(c) wesan *ūsser* hēr　　aldordēma,
'be our ruler here' (2483)

(d) . . . ic hine wergðo on
mīne sette　　and mōdhete,
' ... I set on him my curse and hate' (1755-6)

第二半行の場合、所有代名詞が前置語になっている19例のうち、6例は(10a)のように頭韻に加わるが、後置語になっている32例はいずれも (10b) のように

頭韻しない。一方、所有代名詞が主要語から分離している場合、前置語となっている15例のうち頭韻するのは（10c）を含む6例、後置語となっている15例のうち、（10d）のように頭韻に加わるのは11例である。これらの例から、分離と頭韻は密接な関係にあることがよく分かるが、第二半行中であることの制約は考慮されねばならない。

(10)(a) mægeð tō gemæccum *mīnra* fēonda ;
'the women of my enemies as mates' (1259)

(b) fægre tō Lōthe : "Ic eom fædera *þīn*
'gently to Lot : "I am your uncle' (1900)

(c) siððan þū ūsic under, Abraham, *þīne*
on þas ēðelturf æhta læddest,
'since you, Abraham, brought your possessions into our country, among us' (2677-8)

(d) Næfre gē mid blōde bēodgereordu
unārlīce *ēowre* þicgeað,
'Never eat your table-foods with blood dishonourably' (1518-9)

二重頭韻が見られる第一半行の場合、所有代名詞は（11a）のように3例において前置語として用いられ、10例は（11b）のように後置語となっているが、所有代名詞そのものが頭韻する例は一つもない。後置語となっている（11c,d）の2例については、二重頭韻ではなく、偶然による音の一致の例とみなし、単一頭韻の例に追加することにする。

(11)(a) on *þīnne* wlite wlītan wlance monige,
'many proud ones gaze on your beauty' (1825)

(b) dǣdrōf drihtne *sīnum,* frægn hine dægrīme frōd :
'strong in deeds, wise in number of days, asked him, his Lord' (2174)

(c) mid sunum *sīnum* sīdan rīces
'with his sons a wide kingdom' (1599)

(d) . . . lārum swilce,
þēoden, *þīnum*, and þe þanc wege,
'Lord, ... in such a manner according to your teachings, and give you thanks' (2348-9)

次に、人称代名詞の場合、単一頭韻が実現している第一半行で前置語となっている34例は、いずれも（12a）のように頭韻することはない。（12b）のように

分離し、句またがりとなっている5例においても、人称代名詞は頭韻することはなく、(12c)のように主要語と遠く離れていても頭韻にはまったく関与しない。後置語となる3例は、(12d,e)のように直後に位置していようと遠く離れていようと、人称代名詞は頭韻しない。

(12)(a) ǣr *his* swyltdæge　　suna and dohtra ;
'(he begot a great many) of sons and daughters before his day of death' (1221)

(b) þæt wīf *hire*　　wordum selfa
'this woman (told me first) in her own words that' (2649)

(c) Ōðer *his* tō eorðan　　elnes tilode,
'One gave his strength toward the earth' (972)

(d) mid lācum *hire,*　　līðend brōhte
'with her gifts, the traveller brought' (1472)

(e) brȳd mid bearnum　　under burhlocan
in Sǣgor *his.*　　Þā sunne ūp,
'(he brought) his wife together with his children to the city-enclosure of Segor. When the sun (rose) up' (2539-40)

次に、第二半行の場合、前置語となっている58例の人称代名詞は、(13a) のようにいずれも頭韻せず、また主要語から分離することもない。(13b) のように後続の主要語の初頭音と同じ音で始まる人称代名詞は58例の中に4例あるが、いずれも二重頭韻が生じない第二半行の例であることから、偶然に基づく音の一致であって、主要語に優先して頭韻しているのではない。一方、後置語となる人称代名詞は 6 例あり、(13c)のように主要語の直後に生じる 3 例と、(13d)のように分離する 3 例に分けられるが、いずれの場合でも人称代名詞が頭韻することはない。

(13)(a) bilwit fæder,　　hwæt *his* bearn dyde ;
'merciful Father, what his son did' (856)

(b) oð þæt se hālga　　*his* hlāforde
'until the holy (one) for his lord' (2750)

(c) wǣglīðende,　　swilce wīf *heora,*
'sea-farers, likewise their wives' (1432)

(d) weras mid wīfum.　　On þām wīcum *his*
fæder Abrahames　　feorh gesealde,

'men with wives. In those dwellings Abraham's father gave up his life' (1738-9)

人称代名詞は二重頭韻が見られる第一半行に11回用いられているが、これらはいずれも (14a,b) のように「二重頭韻の半行での詩的許容」は受けていない。(14c-e) の 3 例の人称代名詞は後続の頭韻語と同一の音で始まっているが、これまで検討した例から判断すると、単なる偶然の一致によるものであって、二重頭韻の例ではないとみなしてよい。したがって、第一半行に生じる54例の人称代名詞はすべて頭韻しないことになる。

(14)(a) *his* selfes sele. Sinces brytta,
'his own house. The distributor of treasure' (1857)

(b) mægeð *heora* māgum. Næfre mon earla
'the maidens to their families. Of all (men), no one ever' (2092)

(c) þæt *his* hyldemæg āhreded wurde,
'so that his near kinsman might be rescued' (2032)

(d) *hire* hlāfordum, swā se hālga bebēad,
'to her masters, as the holy (angel) bade' (2297)

(e) mid *his* hīwum. Hæleðum sægde
'with his household. (He) said to the men' (2623)

『創世記A』に生じる所有代名詞と人称代名詞のすべての例を『ベーオウルフ』の場合と同じ要領でまとめると、(15)のようになる。

(15)

			前置語		後置語	
			第一半行	第二半行	第一半行	第二半行
所有代名詞	正常位置	単一頭韻	15 (0)	19 (6)	52 (0)	32 (0)
		二重頭韻	3 (0)	—	10 (0)	—
	分離	単一頭韻	5 (3)	15 (6)	7 (7)	15 (11)
	合計		23 (3)	34 (12)	69 (9)	47 (11)
人称代名詞	正常位置	単一頭韻	34 (0)	58 (0)	2 (0)	3 (0)
		二重頭韻	11 (0)	—	0	—
	分離	単一頭韻	5 (0)	0	1 (0)	3 (0)
		二重頭韻	1 (0)	—	0	—
	合計		51 (0)	58 (0)	3 (0)	6 (0)

III. 考察

3.1. 所有代名詞は、『ベーオウルフ』では前置語と後置語のいずれの場合においても、第二半行中で圧倒的に多く用いられているのに対して、『創世記A』ではむしろ第一半行での例の方が若干多くなっている。これは、前者では詩人が頭韻の必要をまかなうために「第二半行での詩的許容」に訴え、所有代名詞を多く用いているのに対して、後者では、詩人はこの許容の多用を控えていた結果である、すなわち、詩人の文体の差に基づいている、とみなせる。

前置語と後置語の比率についても、『ベーオウルフ』では60.75%対39.25%、『創世記A』では32.95%対67.05%となっていて、両者は正反対の特徴を示している。さらに、Bauer (1963：334) と Mitchell (1985：§295) は、sīn が主要語に対して占める位置の比率は詩によって際立って異なると指摘していることから、前置語と後置語の比率も詩人の文体の差に基づくものと判断してよい。したがって、Fries (1940) が指摘している古英語の名詞の属格形が先行する主要語を限定する主要語—属格形という語順の比率と、主要語—所有代名詞という語順の比率とは史的発達上関連はなさそうである。

Bauer は sīn について「韻律上不可欠である場合には詩に残され、そうではない場合でも時おり残された」と述べている (Bauer, 1963：326-32)。しかし、今回分析した限り、所有代名詞は第二半行において頭韻語としてかなり多く用いられているが、sīn が頭韻に関与している例はまったくない。頭韻上ではなく、リズム上の必要性があったと主張するためには、sīn と h-で始まる人称代名詞の属格形との競合という状況において、sīn は h-代名詞より優位であったことを証明せねばならないが、(8)と(15)のデータはこれとは逆の証拠を提示している。

3.2. 単一頭韻が見られる第一半行では、所有代名詞は主要語に対して、直前・直後を問わず、正常な位置にある限り、頭韻に関与することはないという点では、二つの詩は共通している。このことにより、(2)の「頭韻階級の原則」が詩人の文体に左右されることなく、いかに忠実に守られているかが分かる。

分離と頭韻の関係も2編の詩に共通している。すなわち、所有代名詞が主要語から分離すると前者が頭韻する確率が高くなるが、この現象は前置詞—目的語という正常な語順が倒置によって損なわれる場合に、前置詞が頭韻

しやすくなる現象と類似している（藤原、1990：262-3)。本来は無強勢である前置詞や所有代名詞という階級の低い語を分離や倒置を起こさせることによって韻律上際立たせていることが今回の分析によってより明らかとなった。

3.3. 所有を表すために用いられた人称代名詞の属格形について今回の分析から明らかになったことは、まず第一に、これらの属格形は、第一半行・第二半行の区別や詩人の文体の違いを問わず、ほとんどの例において後置語ではなく前置語として用いられているということである。この事実は、人称代名詞が主要語の性・数・格に依存して語形変化するわけではないことから、詩の場合にも、主要語の直前でなければ統語上の関係が不明瞭となる恐れがあると考えられた、と説明できよう。

次に、人称代名詞はいかなる場合においてもまったく頭韻に関与することはないが、このことは人称代名詞が所有代名詞よりも頭韻階級が低かったことのきわめて有力な証拠となりうる。頭韻上の資格 (status) からすると、人称代名詞は and, gif 'if', ac 'but', oðþe 'or' などの接続詞や、ne 'not', þā 'then' などの副詞と同様であると言える。この事実は、「頭韻階級の原則」、とりわけ (2biv) より詳細な下位区分をする必要があることを示唆している。

IV. まとめ

これまでの分析結果を綜合すると、古英語の所有代名詞と所有を表す人称代名詞の属格形は、統語上の機能は同じであるが、語順や韻律上の特徴はまったく異なることから、両者の言語上の status は少なくとも同等ではなかったと言える。

参考文献

Bauer, Gero. 1963. 'Über Vorkommen und Gebrauch von ae. *sin.*' *Anglia* 81. pp. 323-34.

Campbell, Alistair. 1959. *Old English Grammar.* Oxford: Clarendon Press.

Cassidy, Frederic G., and Richard N. Ringler. 1971. *Bright's Old English Grammar and Reader.* New York: Holt, Linehart and Winston.

Fries, Charles Carpenter. 1940. 'On the Development of the Structural Use of Word-Order in Modern English.' *Language* 16. pp. 199-208.

Fujiwara, Yasuaki (藤原保明). 1987. 'On Identifying Old English Adverbs.' *Historical Studies in Honour of Taizo Hirose.* Tokyo : Kenkyusha. pp. 1-20.

——. 1990. 『古英詩韻律研究』広島：渓水社。

Klaeber, Fr. (ed.) *Beowulf and the Fate at Finnsburg.* Boston : Heath.

Krapp, George Philip. (ed.) 1931. *The Anglo-Saxon Poetic Records.* Vol. I. New York : Columbia University Press.

Mitchell, Bruce. 1985. *Old English Syntax.* 2vols. Oxford : Clarendon Press.

Moore, Samuel, and Thomas A. Knott. 1955. *The Elements of Old English.* Ann Arbor : George Wahr.

Quirk, Randolf, and C.L.Wrenn. 1957. *An Old English Grammar.* London : Methuen.

Wright, Joseph, and Elizabeth Mary Wright. 1925. *Old English Grammar.* London : Oxford University Press.